

『徒然草』研究の序章その4

——有名な段の検証——

土屋 博 映

一、はじめに

本稿は『徒然草』研究の一環として、有名な段が、何ゆえに有名であるのか、『徒然草』を有名にしたという事実もふまえ、有名たる意味を明らかにしたいと考えるものである。発想・構成・主張などに焦点をあてて論を進めることとしたい。

二、有名な段の検証

1、第七段

あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つるならひならば、いかにもののはれもなからん。世はさだめなきこそ、いみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。あかず惜しと思はば、千年を過すとも一夜の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせん。命長ければ辱多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なん

こそ、めやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出でまじらはん事を思ひ、夕べの陽に子孫を愛して、栄ゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくなん、あさましき。

第七段については次のような解説がある。

「人生の無常であるところに、むしろ深い情趣を見いだしているのは、中世らしい新しい見方であるが、後年の兼好にくらべると、そのとらえ方は、まだ情趣的であるといえよう。」(日本古典文学全集・頭注)

この解説では、①「深い情趣」というプラスの見方と、②「まだ情趣的」というマイナスの見方を示している。「情趣」という表現をプラスマイナスの双方に用いているのはただけなもの、主張にはうなずけるところがある。

この段が有名になったのは、冒頭の二文である。就中「世はさだめなきこそ、いみじけれ」という短くまとまった名言が世の人の心をとらえさに違いない。また冒頭の一文も「新しい見方」を、「世はさだめなき」を導く役割を果しつつ、衝撃的に表現している。

兼好は、一段の中で、冒頭または最初の部分に主張をぶつけることが多い。しかもその主張はいつもはなはだ刺激的である。「人は死ぬからいい」といつている。いくら中世であり、美感も平安時代とは異なっているとは言え、そこまで普通はいいきれない。言えば詭弁の匂いがする。

しかし、彼はそれにとどまらず、「命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。」と言い、「かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。」という具体的な人を納得させる例を並べていくのである。言い換えれば、主張を活かすうまい例え、と、いうものなのだろう。彼の文のうまさのポイントの一つである。

以下の論の展開としては、たたみこむような強さは感じられない。その点では今ひとつなのだが、「つくづくと一年を暮らすほどだにも、こよなうのどけしや」とか「千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ」とか「長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ」などと、名言を交えていくのが人の心をとらえたのだろうと考えられる。

世の中の常識、それを逆手にとつて、人の心を捉えていく。現代でも「千円札が落ちていても拾うな」の類といえるかもしれない。つまり、千円札を拾うな、ということが趣旨ではなく、千円程度に眼をむけているようでは一万円は手に入らないというようなことを言いたいのであろう。

「世はさだめなきこそ、いみじけれ」の主旨は、最後の「そのほど過ぎぬれば」以下に暗示されている。この段は「衝撃的な主張↓具体例↓暗示」の構図をもっている。言い切らず「暗示」というのは中世の、新古今和歌集などに見られる修辞法だが、彼は歌人としても一流だったから、意図的ではなく、自然そのような方向で、散文も描けたのかもしれない。

2、第三十段

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく狭き所にあまたあひ居て、後のわざども営みあへる、心あわたたし。日数のはやく過ぐるほどぞものにも似ぬ。果ての日は、いと情なう、たがひに言ふ事もなく、我かしこげに物ひきしたため、ちりぢりに行きあかれぬ。もとの住みかに帰りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。「しかしかのことは、あなかしこ、あとのため忌むなる事ぞ」など言へるこそ、かばかりのなかに何かはと、人の心はなほうたておぼゆれ。

年月へてもつゆ忘るるにはあらねど、去る者は日々に疎しと言へることなれば、さはいへど、その際はかりは覚えぬにや、よしなしごと言ひてうちも笑ひぬ。からは、氣うとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつつ見れば、ほどなく卒塔婆も苔むし、木葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そも又ほどなくうせて、聞き伝ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ心あらん人はあはれと見るべきを、はては、嵐にむせびし松も千年を待たで薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。そのかたちだになくなりぬるぞ悲しき。

第三十段については次のような解説がある。

「第一節に、人の死後にみられる人間の心のたよりなさ冷たさがえぐ

り出され、やがて近親者にさえ死者は忘却され、ついには縁者もまったく絶えはて、墓そのものさえ消滅してしまふ。漸層的に滅びの相をたどり、そのような人間世界に対する深い嘆きでもって一章を結んでいる。ただこの場合、兼好の発想は「…ぞ悲しき」という詠嘆に収斂されてしまい、『白氏文集』の古詩にみられるような、「今我何ぞ営々タル」という対自の問題に、まだきびしくは帰ってこないことに注目したい。」(日本古典文学全集・頭注)

この三十段は、兼好がまだ若かりし頃に書かれたと推定されている。それは論理的というよりは詠嘆的であるからだ。全集の頭注が「悲しき」で終わることについてふれているのはそのことに関連する。

さて「人のなきあとばかり悲しきはなし」という冒頭の一文が本段の全体像を暗示しているわけである。この見解ははなはだ妥当で、一般的である。そこから段階を追って行き、最終的には跡形もなくなってしまうという人間のはかなさを嘆いている。その展開には兼好らしき(と云っておこう)論の新鮮さはうかがえない。本書での第一段階の成立がこの段あたりまでと考えられるのももつともである。

ただどこが人をひきつけるのかというと、人間の死を、墓がなくなるまでの長い時間をかけて追っていること、この、ある意味で宇宙的にとらえるところは兼好の才能の片鱗なのかもしれない。

もう一つは、「我かしこげに物ひきしたため、ちりぢりに行きあかれぬ」を含み、その前後が、人の死をいたむより、自分の生活を考える参列者

の実態が浮き彫りにされていて、そんなところに共感を得たのかもしれない。

マクロ的なとらえ方と、人間の本性を見抜いているところがポイントと考えられる。

3、第五十三段

是も仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、各あそぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおし平めて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座興に入る事かぎりなし。

しばしかなでて後、抜かんとするに、大方抜かれず。酒宴ことさめて、いかがはせんと惑ひけり。とかくすれば、頸のまはりかけて血たり、ただ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、打ちわらんとすれど、たやすくわれず、響きてたへがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に、帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせ、京なる医師のがり、率て行きける道すがら、人のあやしみ見る事かぎりなし。医師のもとにさし入りて、向かひるたりけんありさま、さこそ異様なりけめ。ものを言ふもくぐもり声に響きて聞こえず。「かかることは文にも見えず、伝へたる教へもなし」と言へば、又仁和寺へ帰りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覚えず。

かかるほどに、ある者の言ふやう、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、

命ばかりはなか生きざらん。ただ力を立てて引き給へ」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちぎるばかり引きたるに、耳鼻かけうげながら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

第五十三段については次のような解説がある。

「我を忘れ調子にのつて、その場の主役にせせり出る人間、状況の急転でそれを喝采した仲間は、たちまち嘲笑する他者となる。得意の主役は転落の結果、苦しめばそれだけ滑稽な対象になる。仁和寺圈内という兼好に身近い場所で聞きえた説話を生き生きと描き出すことで、人間の弱点を、その心理の中にはいつて、きわめて巧みに客観化しえている。このような喜劇的な人間の姿を、つきはなしてとらえ、彼の、いわば見る立場を対置するのである。」(日本古典文学全集・頭注)

解説のとおりであると思う。喜劇は悲劇とつながる。天国から地獄へというのは人間にいつもつきまといっている。それを他人事としてのめりこまず、客観的に描く。これがいわゆる兼好らしさと言える段である。

人々に受けたのはなぜか、具体的に見てみよう。まず構成としては、酔って興にのる法師の姿が描かれる。ところが、突然被った「足鼎」がどうやって抜けられないという悲惨な状態に反転する。最後は「ある者」の決断により九死に一生を得る、という三部構成。「序破急」というテクニクを用いている。そしてもっとも大事なことは、彼が自分の感情を

交えていないということだ。あくまでも事実を淡々と描くに徹する。また「医師」と「ある者」の対比もおもしろい。学問を積んだはずの「医師」が無策で、「ある者」の積極的な行動が法師を助けるのだ。兼好はブランドを認めない。「医師」という名前に頼っている者が如何につまらない人間かを物語っている。彼の結論は「からき命まうけて、久しく病みゐたりけり」である。かれは自己の主張を結論として表現しない。あくまでも読み手に判断をまかせるのだ。なお、法師が名刹の「仁和寺」の法師であることも、もちろん効果をあげている。

まとめてみよう、①構成の妙、②意外性、③客観的表現、④暗示的、⑤ブランドへの挑戦、といったところだろうか。

4、第五十九段

大事を思ひたたん人は、去りがたく、心にかからん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。「しばし、この事はてて」、「おなじくはかの事沙汰しおきて」、「しかしかの事、人の嘲やあらん、行末難なくしたためまうけて」、「年来もあればこそあれ、その事待たん、ほどあらじ。もの騒がしからぬやうに」など思はんには、えさらぬ事のみいとどかさなりて、事の尽くるかぎりもなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう、人を見るに、少し心あるきは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。

近き火などに逃ぐる人は、「しばし」とや言ふ。身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨てて遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは、

無常の来る事は、水火の攻むるよりも速やかに、遁れがたきものを、その時、老いたる親、いとなき子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざらんや。

第五十九段については次のような解説がある。

「前段の、出家人に対する同情的な配慮に続いて、この段では出家を決心するにあたつての決定的な条件、「所縁放下」の徹底が説かれる。つまり「一大事」である。文章も漢文訓読体に近い、現在法の強調表現で、説示的な主張になつてくる」（日本古典文学全集・頭注）

解説にあるとおりである。冒頭の一文がすべてを物語っている。「所縁放下」はとくに兼好の独創ではあるまい。ではどこに彼らしさがあるかというところ、「少し心あるきは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。」であろう。要するに中途半端を戒めているということだろう。出家する者、しない者、それはいい。しかし出家しようというばかり、つまり口先だけで一向に出家しないことを戒めているのである。「有言不実行」、これを嫌うのが彼らしさであろう。

5、第八十九段

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」と、人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経あがりて、猫またに成りて、人とする事はあなるものを」と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏とかや、

連歌しける法師の、行願寺の辺にありけるが聞きて、ひとり歩かん身は、心すべきことにこそと思ひける比しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、ただひとり帰りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたず足許へふと寄り来て、やがてかきつくまに、頸のほどを食はんとす。肝心失せて、防がんとするに、力もなく足も立たず、小川へ転び入りて、「助けよや、猫またよや、よや」と叫べば、家々より松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こは如何に」とて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物取りて、扇・小箱など懐に持ちたりけるも、水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふはふ家に入りにけり。

飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。

第八十九段については次のような解説がある。

「遁世者といつても連歌師の俗僧が、怪猫ありとの暗示にかかつて、飼い犬にじゃれつかれたのに、恐怖のあまり川にころげこむ。その日の賭物も水に入れてしまい、やつとのことでわが家にたどりつく。その行動の始終が、実に生き生きととらえられている。そのうえ、最後の一句で、とどめをさされるが、これもまた、作者のえせ出家に対する嫌悪と批判とが、いかに痛烈であったかを示すものである。」(日本古典文学全集・頭注)

解説の「えせ出家に対する嫌悪と批判」は、そのとおりである。大体

が、僧侶の分際で毎夜連歌の会に行くこと自体、許されることではない。権力やブランドに対する批判は、彼の得意とするところで、その小気味よさが一般受けしたことは言える。また、構成の妙ということも言える。最後の一文までは、「猫また」が本場に現れ、九死に一生を得たように思わせる臨場感はいしたものだ。そこで最後の一文が、落語で言うオチである。幽霊の正体見たり枯れ尾花、というところ。この意外性が最大のポイントであろう。そして、彼はこの事件に関して、自分の主張を加えない。あくまでも淡々と事実を客観的に描くばかりである。①権力への挑戦、②構成の妙、④意外性、⑤客観性、というのが本段の特徴である。

6、第百九段

高名の木登りといひしをのこ、人をおきてて、高き木に登せて梢を切らせしに、いと危く見えしほどは言ふ事もなくて、おるるときに軒長ばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるるともおりなん。如何にかく言ふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき、枝危きほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。あやまちは、やすき所になりて、必ず仕る事に候」といふ。

あやしき下らふなれども、聖人の戒めにななへり。鞆も、難き所を蹴出して後、安く思へば、必ず落つと侍るやらん。

第百九段については次のような解説がある。

「木登りの名人の言葉には、彼の経験に基づいて、人間の心理の微妙な動きが的確にとらえられている。次の段も同様であるが、単なる道学的説示ではなく、そのような人間心理に対する作者の明識をこそ留意すべきである。」（日本古典文学全集・頭注）

解説には「人間心理に対する作者の明識」などとあるが、それはこの段の主題ではない。「あやしき下らふなれども、聖人の戒めにかなへり」に主題はあると見るべきである。身分が低い者でも、高德の僧と同じ境地だと言うのである。つまり身分にはだまされず、人間はブランドではない、如何に生きているかだ、という彼らしさが主題に関わっている。また、自分の実体験を、具体的、客観的に描いているのも彼らしさと言える。「あやまちすな。心しておりよ」は意外性である。人間は常識で生きている。疑うことのない常識が、実はそうではなかった、という意外性である。

まとめてみよう。①ブランドの否定、②具体的・客観的、③意外性、というところである。

7、第百四十一段

悲田院堯蓮上人は、俗姓は三浦の某とかや、さうなき武者なり。故郷の人の来りて物語すとて、「吾妻人こそ、言ひつる事は頼まるれ、都

の人は、ことうけのみよくて、実なし」と言ひしを、聖、「それはさこ

そはおぼすらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに、情あるゆゑに、人の言ふほどの事、けやけく否びがたくて、万え言ひ放たず、心弱くことうけしつ。偽せんとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意とほらぬ事多かるべし。吾妻人は我がかたなれど、げには心の色なく、情おくれ、ひとへにすぐよかなるものなれば、始めより否と言ひてやみぬ。にぎはひ豊かなれば、人には頼まるるぞかし」とことわれ侍りしこそ、この聖、声うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひしに、この一言の後、心にくくなりて、多かるなかに寺をも住持せらるるは、かやくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと覚え侍りし。

第百四十一段については次のような解説がある。

「都会人である兼好が、東国武士出身である上人の、思いのほか柔軟な言葉によって、上人に対する評価を改めた話である。東国人が剛直で心情のこまやかさに欠けるといふ、当時の都びと一般的な見解が、兼好のものであったことは、前の「荒夷」についての話によっても明らかである。何回か関東に行き、関東に滞在したにしても、しよせん兼好は都会人であり、貴族社会の一員であった。ただこの場合、兼好は個別的に観察することを忘れてはいない。」（日本古典文学全集・頭注）

解説の「しよせん兼好は都会人であり、貴族社会の一員であった」と

いう部分には少々納得がいかない。「荒夷」に対しても、人間として、同等という意識が根底にあるから、認めることが出来たのだと考える。この段の兼好らしさは、「荒夷」である「さうなき武者」であった「聖」が、知識人的な発言をする意外性にある。また「故郷の人」の会話と「聖」の会話を対照的に、一気に最後の結論までもつていく構成にも注目したい。

まとめてみよう。①同等意識、②意外性、③構成の妙、というところである。

8、第百四十二段

心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり。ある荒夷のおそろしげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さては、ものあはれは知り給はじ。情けなき御心にぞものし給ふらんと、いとおそろし。子故にこそ、万のあはれは思ひ知らるれ」と言ひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かかる者の心に慈悲ありなんや。孝養の心なき者も、子持ちてこそ、親の志は思ひ知るなれ。

世を捨てたる人の、万にするすみなるが、なべてほだし多かる人の、万にへつらひ、望み深きを見て、無下に思ひくたすは僻事なり。その人の心になりて思へば、誠になしからん親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗みもしつべき事なり。されば、盗人をいましめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の餓えず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人、恒の産なきときは、恒の心なし。人、きはまりて

盗みます。世治まらずして、凍餒の苦しみあらば、咎の者絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはん事、不便のわざなり。

さて、いかがして人を恵むべきときならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で農を勧めば、下に利あらん事、疑ひあるべからず。衣食常なるうへに、僻事せん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

第百四十二段については次のような解説がある。

「前段に続いて、東夷の意外な善言を語り、人民の心情に参入することによって、罪人をつくる悪政の批判に及んでいる。『孟子』の言葉に基づいているけれども、兼好の発想は政治論ではない。子を持つもの、係累を捨てがたい常人の心理にわけ入ったの立論であるところに独自性がある。政治論としては、普通の撫民勸農思想で、孟子の立論から特に進み出ているとはいえないけれども。」(日本古典文学全集・頭注)

解説については、そのとおりだと言うしかない。本段の兼好らしさは、「荒夷」の見かけに寄らぬ意外性にある。「心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり」が主題である。ところが、その主題がそれていく。「世を捨てたる人の」以下は、家族愛は盗みさえするということから、「恒産恒心」にまで展開、さらに政治のあり方にまで広がっていく。論としては一貫性がない。決してすぐれた内容ではないが、①冒頭の一文と②意外性がこの段を有名にしたのである。

9、第百五十五段

世に従はん人は、先づ機嫌を知るべし。ついで悪しき事は、人の耳にもさかひ、心にもたがひて、その事ならず。さやうの折節を心得べきなり。但し、病をうけ、子うみ、死ぬる事のみ、機嫌をはからず、ついで悪しとてやむことなし。生・住・異・滅の移りかはる、実の大事は、たけき河のみなぎり流るるが如し、しばしもどこほらず、ただちに行ひゆくものなり。されば、真俗につけて、必ず果し遂げんと思はん事は、機嫌をいふべからず。とかくのもよひなく、足をふみとどむまじきなり。

春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は即ち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり梅もつばみぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず。下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下に設けたる故に、待ちとるついで甚だはやし。生・老・病・死の移り来る事、またこれに過ぎたり。四季はなほ定まれるついであり。死期はついでを待たず。死は前よりも来らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、まつこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の満つるが如し。

第百五十五段については次のような解説がある。

「生から死への必然、その運行のげしき、きびしさが、まず指摘される。その主張は無常の確認に支えられて、きわめて積極的である。さ

らに自然の運行が内在的超出作用に基づき、新しく興るもののおしあげの力によつて展開するという、いわば弁証法的な発展の論理が示される。しかも死は、必ずしも漸進的に運行されるのではなく、飛躍的に実現されることを、自信にみちた、またそれにふさわしい力強い表現でもつて、断言的に主張している。このあたりは、兼好の思想の最も緊張かつ高揚した時期になるものと考えられる。」(日本古典文学全集・頭注)

「思想の最も緊張かつ高揚した時期になるもの」かどうかはともかく、解説の内容については、概ねそうだろうと納得できる。

兼好らしきは、冒頭の一文である。「世に従はん人は、先づ機嫌を知るべし」が主題であり、簡潔明瞭、キャッチフレーズの明快さをもつて文を書き始めるのは彼の個性である。物事が行われるには必ず時機があるという彼の考えは納得しうる。しかしそこから論はそれていく。

「生・住・異・滅」は時機など考えない、つまり世の中は無常だと述べ、「されば」以下で、出家は思い立ったらすぐにすべきだと言う。ならば最初から「出家は機嫌によらず」と言えばよい。さらに時の移りは眼前にどんどん進むことを述べ、最終的には、「死」は時をかまわず訪れるという無常観を述べてまとめている。結局①冒頭の一文と、②「されば、真俗につけて、必ず果し遂げんと思はん事は、機嫌をいふべからず」の一文の二箇所が兼好らしきということになる。論の展開と内容というよりは、名文による評価である。

10、第百八十四段

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるる事ありけるに、すすけたる明り障子のやぶればかりを、禪尼手づから、小刀して切りまはしつゝ張られければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「給はりて、なにがし男に張らせ候はん。さやうの事に心得たる者に候ふ」と申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景、「皆を張りかへ候はんは、はるかにたやすく候べし、まだらに候ふも見苦しくや」とかさねて申されければ、「尼も、後はさはさはと張りかへんと思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見ならはせて、心づけんためなり」と申されける、いとありがたかりけり。

世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下を保つ程の人を、子にて持たれける、誠に、ただ人にはあらざりけるとぞ。

第百八十四段については次のような解説がある。

「兼好の政治の理想は、『上の奢り費す所をやめ、民を撫で農を進め』（百四十二段）るといふ、当時としても、ごく常識的な撫民思想を出なかつた。もちろん兼好には、虚飾と華美とを、美的に拒否するところが一貫してあったが、この段では、治世道徳のがわに収斂され、くり返し禪尼をほめているわりには、その文体は緊張した張りに乏しいように思わ

れる。」（日本古典文学全集・頭注）

「くり返し禪尼をほめているわりには、その文体は緊張した張りに乏しいように思われる」という印象的な発言には承服しがたい。

兼好が言いたいのは「世を治むる道」以下の文である。有名な北条時頼の母が儉約の気持ちの時頼に教えたという言い伝えに感心しているのである。女性でも、馬鹿にできない、と言うのは、人間の価値は思考と行動によつて決まる、という彼のポリシーが述べられているのである。

ところで、本段が有名なのはそんなことではない。母の禪尼と兄の義景とのやりとりの意外性である。義景の言い分がもつとも、と思われたところに、「若き人に見ならはせて、心づけんためなり」とある部分があるほど、そうだったのか、と読む人を感動させたわけである。二人の会話を忠実に再現するところが兼好らしさである。

11、第二百十五段

平宣時朝臣、老ののち、昔語りに、「最明寺入道、ある宵の間に呼ばれる事ありしに、やがて、と申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、又使来りて、直垂などのさぶらはぬにや。夜なれば異様なりともとく、とありしかば、葵えたる直垂、うちうちのままにてまかりたりしに、銚子に土器とりそへて持て出でて、この酒をひとりたうべんがさうざうしければ、申しつるなり。さかなこそなけれ、人はしづまりぬらん。さりぬべき物やあると、いづくまでも求め給へ、とありし

かば、脂燭さして、くまぐまをもとめし程に、台所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、これぞ求め得て候、と申ししかば、事足りなん、とて、心よく数献に及びて、興にいられ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか」と申されき。

二百十五段については次のような解説がある。

「古老からの聞き書きによって、時頼時代には保たれていた簡潔な武家の生活を示し、兼好時代の為政者に対する批判をしたものと思われる。しかし兼好の意図如何にかかわらず、この説話には、簡素で同族的・同志的な武家の結びつきが、いかにも簡潔にとらえられている。」(日本古典文学全集・頭注)

解説については、そのとおりである。平宣時の昔語りを、兼好が伝え聞いて、そのまま書き記したものである。兼好自身は、華美は好まない。だから、兼好らしさの一つは、簡素・儉約を好むということになる。世の中に受けたのも、そこにある。時の執権であった北条時頼が、若き平宣時と、身分をこえて、対等で質素に酒を飲む。心が通えば、高級料理がつまみでなくても、味噌でもおいしく酒が飲める、といったかったのである。

「その世にはかくこそ侍りしか」はもちろん現代批判であるが、婉曲的に批判するところも兼好らしさである。

12、第二百三十六段

丹波に出雲と言ふ所あり。大社を移して、めでたく造れり。しだのなにがしとかやしる所なれば、秋の比、聖海上人、その外も、人数多さそひて、「いざ給へ、出雲拜みに。かいもちひ召させん」とて、具しもて行きたるに、各拜みて、ゆゆしく信おこしたり。御前なる獅子・狛犬、背きて、後さまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子の立ちやう、いとめづらし。深き故あらん」と涙ぐみて、「いかに殿原、殊勝の事は御覧じとがめずや。無下なり」と言へば、各怪しみて、「誠に他にことなりけり。都のつとに語らん」など言ふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習ひあることに侍らん。ちと承らばや」と言はれければ、「その事に候ふ。さがなき童どもの仕りける、奇怪に候ふことなり」とて、さし寄りて、据ゑなほして往にければ、上人の感涙いたづらになりけり。

第二百三十六段については次のような解説がある。

「覚めた人である兼好にとって、愚者の過信は笑うべきことであった。子供の悪戯の結果を、何か特別の神意でもあるかのように受けとった。聖海上人は、そこで笑いとばされる。上人の言葉に感心する一行の姿も同時に笑いの対象として、はなはだユーモラスに描かれており、それだけかえって兼好の批判は痛烈である。」(日本古典文学全集・頭注)

解説についてはそのとおりと言ってよいだろう。これも聞き書きだが、事実を会話中心に客観的に記したところが兼好らしさである。とくに「御前なる獅子・狛犬」からは文を切らずに一気に意外な結末まで言い切るところがそれにあたる。最後の「上人の感涙いたづらになりけり」は、「猫また」の段と通じるオチである。「上人」というブランドに寄りかかり、勝手な思い込みで人々を馬鹿にする聖海上人とそれを簡単に信じ込む人々を「痛烈に批判」しているわけだが、兼好は世の中一般の権威に対し、批判していることを忘れてはならない。

まとめると、①客観的、②意外性、③ブランドの否定、といったところである。

三、結論

『徒然草』を有名にしたのは、何か、どこが面白いのか、ということはある。あまり論じるべきテーマではないかもしれない。主観的になりすぎる恐れがあるからだが、『徒然草』の本質に迫るには一度は叩くべき必要のある門であると言える。

そこで、『徒然草』の中で、よく知られていると考えられる十二段を（主観的と言えば、まさに主観的ではあるが）とりあげ、どこが一般に受けたのかを検証してみたわけである。そのポイントは、何か、取り上げてまとめたい。

まず第一は内容（題材）である。

内容は、①随想的なもの、②伝聞的なもの、と大きく分けられる。①

にあたるのが、第七段、第三十段、第五十九段、第百五十五段、の四段で、他はすべて②伝聞的なもの、である。一応、『徒然草』を有名にしたのは、伝聞的な、聞き書き的な、面白い話だということが言えそうである。

では、①と②が有名な理由は何かをまとめてみよう。

①随想的なもの

イ、名句と呼ばれるような簡潔・明瞭な一文があること。

「世はさだめなきこそいみじけれ」（第七段）、「人のなきあとばかり悲しきはなし」（第三十段）、「大事を思ひたたん人は、去りがたく、心にからん事の本意遂げずして、さながら捨つべきなり」（第五十九段）、「世に従はん人は、先づ機嫌を知るべし」（第百五十五段）などである。

ロ、名句を含み、衝撃的な文を織り込みながら論を展開すること。

「あだし野の」（第七段）では「世はさだめなきこそ、いみじけれ」といい、さらに後で「長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ」とたたみかけ、論を展開していく。

ハ、主張・結論は暗示すること。

「大事を思ひ立たん人は」（第五十九段）では、「その時、老いたる親いときなき子、君の恩、人の情け、捨てがたしとて捨てざらんや」と強調し、「思い立ったらすぐに出家せよ」という主張を暗示している。この暗示が余情となり、人々に受けた要素となったのだろう。

②伝聞的なもの

イ、事実を客観的に描写し、感情を交えないこと。

「仁和寺の法師」(第五十三段)では、酒宴の場面、足鼎が抜けない場面、医師の所に行く場面、母たちが嘆く場面、鼎を引き抜く場面、これらが、まったく作者の感情を交えずに客観的に描写される。

ロ、予想もしないような意外な展開になること。

「丹波に出雲」(第二百三十六段)では、上人が「いみじく感じて」となった「獅子の立ちやう」が、実は「さがなき童べどもの仕りける」ことであつたという意外性のおもしろさが人をひきつけた。

ハ、最後にオチがつくこと。

「奥山に、猫また」(第八十九段)では、「連歌しける法師」が、噂どおりに「猫また」に襲われ、九死に一生を得たと思われたら、最後に「飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛び付きたりけるとぞ」という種明かしで終わっている。これは意外性とも関連がある。

ニ、身分の低い者が、貴人・高僧等と同じような良い発言をすること。

「高名の木登り」(第百九段)では、「高名の木登り」の、実体験で学んだ「あやまちは、やすき所になりて、必ず仕る事に候」を「あやしき下らふなれども、聖人の戒めにななへり」と評価している。兼好は、身分とか性別とかで人を差別しない。何を考え、どう具体的に行動するかを良く見て評価している。口先ばかりの抽象的人間は好まなかつた。それが世の中に受けた理由でもあるだろう。